

東京市養育院に奉職して

萱野まさ

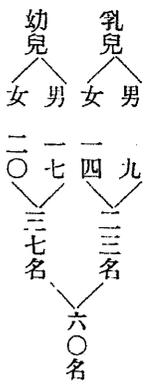
子は親の許にはぐくまれるものより外知らなかつた私に、之は何も云ふ奇異な哀しい情景の多いこゝみであつたらう。

子等の泣聲が耳について、或は、足の重い朝もあつたが、そうした感傷に逡巡して居れぬ自分の使命を自覺して弱い心を鞭ちつゝ努力して來た自分であつた。

託兒所、幼稚園には、多少の經驗を持つてゐてもこうした孤兒相手には全然一年生である。

今迄の一切の概念を棄て、母としての心から出發しなければ本當でないと思ひ、又新たな苦勞をなめて、早や半年を迎へ様としてゐる。

現在育兒室の收容數は



その收容以前の家庭の状態は、

棄兒	父母不明のもの	二三名
母死亡のもの	母死亡のもの	六名
母病氣のもの	母病氣のもの	五名
父不明のもの	父不明のもの	四名
父死亡のもの	父死亡のもの	四名
父病氣のもの	父病氣のもの	三名
父死亡のもの	父死亡のもの	二名
父病氣のもの	父病氣のもの	二名
父死亡のもの	母不明のもの	二名
父死亡のもの	母不明のもの	一名
父病氣のもの	父病氣のもの	一名
父母在るもの	父母在るもの	三名

この東京市養育院本院育兒室は、出生より四歳迄を本體とし、幼稚園教育は、千葉縣安房分院に、普通及補習教育は、巢鴨分院にて行ふ組織となつてゐる。

然し病弱の幼兒は、本院に置くので、事實は、五歳以上

十三歳の子供も一緒に生活してゐる。

大別して、乳児部と幼童部とに二分され、一日の生活は左の通りである。

乳児部

午前七時 授乳、顔面口腔清拭、襦袢交換、検温

八時 診察、處置

九時 入浴

十一時 授乳、顔面口腔清拭、襦袢交換

十二時 食餌

十二時半—午後三時 なるべく戶外にて運動

午後三時 授乳、顔面口腔清拭、果汁給與

五時 食餌

七時 授乳、顔面口腔清拭、襦袢交換

午後十一時 授乳、顔面口腔清拭、襦袢交換

午前三時 授乳(その子丈襦袢交換)

幼童部

午前五時 起床、着換へ

午前七時三十分 洗面後朝食

九時 診察、處置、運動

十時 お八つ、遊戯、なるべく戶外にて運動

午前十一時三十分 手洗ひ 晝食

十二時三十分—二時三十分 午睡

午後二時三十分 入浴

四時三十分 手洗ひ 夕食

六時 就寢準備

七時 就寢

人員の移動は、死亡、病氣、引取出院、分院移管、新入室 等にて生じる。

死亡は、幼童部は殆んぎないが、乳児の多くは棄兒で、入る以前に、殆んぎ極度の生活をしてゐたらしく、栄養不良、消化不良を起して居るので醫師はじめ、一同の手厚い介抱にも抱らずはかなくその生を終る者のあるのは、いたましい限りである。

引取出院は、或は、身許確かな、子供のない家庭へ引取られるもの、又は、親の病氣全快や、生活の安定を得た爲に、その子供を引取りに来るものを云ふので、之は、全體の割には、まことに數少く平均一ヶ月一人位の割である。

親の手に引かれながら、恥かしそうに、又一面うれしうに連れ立つて行くのを見送る大勢の子供達は、親子一緒に家庭に歸るなき思ひ様もない日常の生活なので、別に羨やましくも思はぬ丈に一入胸のしめつけられる思ひがする。

子供の中には、父母に死に別れ、永久に迎ひを待つすべもない者もあるのだ。

そんな子供を、しっかりと抱いて、涙がにじみ出る。

新しく入つて来る子供は、救護法に依るものが多い。中には、生活に困つてゐても、さうしても子供を置いて歸るに忍びず、又抱いて戻る親もあつた。

親を慕ふ位の子供は、智能もやゝ普通であるが、一向にそんな事に無頓著な子供は、さこか缺陷を持つてゐる。

七歳の一男兒、之は両親が置き去りにしてしまつたのであるが、脳膜炎を患つたらしく、丸で白痴で、勿論口はきかず御飯も一人で食べられず、便所へ行く事も知らず、只一日、室の隅に坐つたまゝ兩手を頭に上げるか、布をグル／＼まわすしかやらない哀れな状態であつた。

何から先の手をつけたらいいか、全く途方に暮れたが、先づ、何よりも、食事を一人でする様にし、思ひ、スプーンを持つ事から教へにかゝつた。握る事すら知らず、持たせても、それをつかまへやうとはしない。

まして、茶碗を持つ事も出来ず、こちらが持つてスプーンを持つ様支へてやり、漸く一人で握る事を覚えさせ、茶碗は飯臺に置いたまゝを續け、次に、茶碗を持たせた。最初の間は、手が疲れるを見え、一寸眼をはなせば下へ置いたが、段々習慣つて、やつと一人前に自分の力丈で食事が出来た。更にスプーンを箸にかへて、今では、こぼしはするが、さうやら目立たなく、皆と同じ様子になつた。

便所は、最初は、何にしてもいやがつて、いつ迄経つても用を足さず、いゝ加減根氣負けの態であつたが、こもらが根負けしては思ひ、暫らくつきつりで、お腹をさすつたりして暗示を與へて見たら、漸く、する様になり、それからは、次第に習慣になつて、用が濟めば、聲を出して、知らせる様になつた、叱れば、やはり恐しい表情もするし、又、私がお勝手に料理をしてゐるさ、入口に来て、つぶつもりなのだらう、アーもウーもつかぬ聲を出し、名前を呼んでやるさ、うれしそうな顔をしてゐる。

さうにかして智能を開いてやりたいものである。其他、口や手足のきかぬ子供も少数ながらあり、こんな子供にかゝり切りでも充分と思ふのに、大勢の事故、特別の保育法も、今の所出来ず、只一日一日を忙がしく過して、全く子供に濟なく思ふのみである。

親子共に生活出来ぬ事、この事丈でも何をおいてもいたはつてやらねばならぬ子供達であるのに、永く居れば、つひ、子供を集團的に取扱ひ易いのは、最も警戒しなければいけないと思ふ。それ故に私達は、ひまを利用して、つめて廣く、實社會に觸れ、哀れな子供へのいたはりの根を枯らさぬ様心掛けてゐる次第である。(以下六九頁へ)

これだけ教へて頂いたら、しばらくの材料には困らないぞといった表情のよみさられる手技の講習、保育の日々にあたつてゐるものは、ぢかに入用な材料を頂戴するのは何より嬉しいことでございます。この外本年は待望久しいものであつた觀察の實際について、社會方面と自然方面から説かれましたので行ふべきを行ひ、迷ひを迷ひとする指針をたしかめて頂きました。

なほ、日本幼稚園協會主催で遊戯の講習がありました。特に本年は新作詞、新曲の編になる新體幼稚園唱歌、新幼稚園唱歌が發表されました。これによる戸倉師の遊戯も新々づくめの外に、動的な新生面を見せて下さいまして、はからずもこの非常時において、唱歌と遊戯に一大割期を描いたわけで、會員一同我れを忘れて踊りつゞけますと同時に、運動シーズンを前にして大きな收穫を得たことを喜びました。

はる／＼と集つて來られた會員は、朝鮮から、滿洲から、臺灣からさいふ有様で、大講堂にぎつしりさいふ盛會でありました。中には一年に一度相會ふさいふ人々でございますが、いはゞ同志の士さいふた堅い默契で結ばれて居ります。いざ、皇國への御奉公、幼児教育への邁進と、人々の

眼顔に堅い決心をきりかはしつゝ、軍國時日本の保育講習を終りました。
(昭和十三年八月、新庄)

(六七頁よりつゞく)

お揃ひの着物を着た子供が四五人、固い砂場で砂いちりをやつてゐる。

爛漫と咲きかほる櫻の花びらが雪の様に降りしきつてせめて、その身邊を飾つて呉れてゐる。

風吹けば庭一面の花吹雪

蝶よ蝶よと 子等は追ふなり

夜になれば、母も慕ひもせず友達同志相寄り合つて、安らかに眠りに落ちる子供等の寝顔

泣き止まぬ孤兒を抱きて外に出れば

夕闇深く 我を覆へり

庭に充つ蟲のすだきに驚きて

はたき黙しぬ 泣けるをさなご